東京人類學會雜誌　第二百六號
明治三十六年五月二十日發行

論說及報告

○第五回內國勸業博覽會に於ける人類學

坪井正五郎

現に大阪で開會中の博覽會は其頭に內國と云ふ言葉と勸業と云ふ言葉とを戴いて居るのですから、其中に人類學に對する特別の部の無いのは勿論の話ですが、見方に由つては隨分人類學上利益に成る事が有ります。博覽會の場外にも此度の催しを機として樣々の興行が有りますから夫れ等をも引きくるめて見る時には少からぬ人類學上の智識を得る事が出來ます。此先きまだ二ヶ月間も開會の事ですから、縱覽者の便を謀つて案內記躰のものを書く事に致しました。此後見られる方には之を參照されん事を御注意致しますが、既に見られた方には是に由つて記憶を喚起されん事をお勸め申し、見る機を得られない方には是に由つて景況の大概を推察されん事を希望致します。如何なる所に如何なる物が有るかと云ふ事丈は前號の雜報にも出て居ますが、此所には稍々精しい紹介を致す積りで有ります。博覽會見物を仕た人に「どんな物を御覽でした」と聞くと多くは「餘り物品が澤山有つたので唯々色々の物が有ると感じた丈でこれぞと云つて意に留まつて居る物も無い」とか或は「今考へると大きな建て物の形が腦裡に浮かんで來る丈で其他の事はボーッと仕て居る」とか云ふ返事に出會ひます。如何にも一定の目的無しに見物すればそんなもので有りませう。私は單に娛樂として博覽會見物をする人々も其中で特に何を注意すると云ふ樣に仕たならば面白味が一層深からうと思ひます。注意すべき事は種々有りませう。併し人類學の側から見ると云ふのも慥に面白い見方の一つで有ります。或は平生斯かる事に志して居らぬ人もこれが爲に趣味を解するに至るかも知れません。若し左樣な事が有れば誠に幸で有ります。

正門を入ると右が農業林業水產等の諸館、左が工業館で有りますが、其邊には人類學上注意すべき物も見當りません。工業館を左にして中央庭園を進んで行と工業館の後の方に道を隔てゝ一構へを成した建て物が有る。庭園の方に向つた入り口の額を見れば敎育館と書いて有る。此館の內には種々參考と成る物が有りますから入つて見るが宜しい。這入つて右を見ると美術學校の出品が有つて、其隣が文部省の區域、此所に接して金澤醫學專門學校解剖學敎室出品の人躰解剖摸型が有る。屍躰の實物から型を作つて石膏細工とし着色したもので、筋肉血管等の有樣が好く分かる。實際の人躰解剖を見る便宜の無い人々は之を熟視して人躰構造の大略を知るが宜しい。同じ側を進んで行くと大阪の部に達する、此所に吉田義一出品の猿の剝製、猫の解剖實物、辻喜平出品の猩々の骨格、野澤利三郎出品の人躰內臟蠟細工摸型、猿の骨格、前川善兵兵衞出品猿解剖實物等が有る。彼れ此れ比較すれば人類と獸類との躰格構造上の異同が悟られる。尙ほ進んで館の端に達し左側に移つて壁上を見れば開盛館三木佐助出品の猫の解剖圖と猫の骨格圖とが懸かつて居る。これも人獸比較の參考と成る。左側に添つて元の方即ち、入り口の方へ戻り乍ら注意して來ると東京の部に美滿津商店出品の男女全身解剖摸型、人の頭蓋、人の全身骨格が有る。是等も前に揭げた金澤醫學校及び大阪野澤利三郎の出品と共に人躰構造を知る爲に大利益が有る。同く美滿津商店の出品に人類胎兒の增大摸型が有る。これは懷胎二週乃至四週のものを寫したので、人類發育の大略は是に由つて窺ふ事が出來る。菊地鑄太郎出品書學用石膏摸型中にも參考と成る物が有る。夫れは古代彫刻の摸造で有りますが、何れの點に注意すべきかと云へば鼻の形特に之を側面から見た形が面白いので有ります。或る物は額から之を鼻の端迄殆ど一直線を成して居り、或る物は額と鼻との境に凹みとも云ふ可き段がつて鼻の背は膨れ出して居る。甲の方はギリシャ鼻、乙の方はローマ鼻と稱へられて居るもので、種族に從つて鼻の形の異ると云ふ事、及びローマ、ギリシャと一口に云へど、少くとも鼻の形に於て違ひの有る事が分かる。安井

清出品の人の腦の摸型、米山米吉出品の犬、兎、鳩、鰐、蛙、鮭、鮫、八ッ目鰻の腦の摸型は相接して陳列して有るので腦の構造を比較するに甚便利で有る。以上教育館に於て學び得るのは人類本質關係事項で、人類は其成り立ちに於て動物の一、哺乳類の一、特に猿の類に近いもので有るとの事は十分に理解出來やうと思ひます。我々は教育館の列品に由つて此事を知り得ると同時に、又人類をして他動物と異る看を呈するに至らしめたのは主として教育の結果で有るとの事を深く感ずるので有ります。元の入り口から庭園に出て噴水塔と花壇との間を横切り、向ふ側へ行き水産館を右にし機械館を左にして進むと通運館の前に出る。館内には通運に關する種々の物が有るが我々の目に面白く映ずるのは京釜鐵道株式會社の出品で、本館中央山陽鐵道株式會社出陳の客車の傍、入り口の方から順に進むとすれば此客車の右に當つて陳列して有る。夫れは何かと云ふと韓國の乘り物の類で、先づ第一が甫轎と云ふ輿、次は軺軒と云つて輿の下に長い棒を添へ是に車一つを付けたもので、兩人で擔ぎ乍ら車に由つて押し轉がして行くと云ふ奇妙な乘り物、夫れから四人轎と云つて四人で擔ぐ樣にして有る輿。是等を見れば韓國風俗の一端を窺ふ事が出來ます。

通運館の隣りの機械館を通り越して其隣りの參考館へ行くと我々の爲にも大に參考と成るものが有る。正門通りの庭園の方から入るとすれば直に左の角に瑞穗屋出品齒科用品陳列棚が見える。其中央に飾つて有る人類の顎骨は齒と骨との關係を好く示して居ますから、教育館で見た所を補ふ爲に熟視する價値が有ります。中庭への出口の傍、左へ二三間行くとサンフランシスコ寫眞師石黑市太郎出品の寫眞が掲げて有る。右に有るのはフランス婦人、正面の右寄りの所に有るのはアメリカ婦人の寫眞。人種容貌調査の一材料と成る。正門通り庭園からの入り口の方に戻つて右に曲つて進んで行くと左側に紫幕を張り廻らした一構へが有る。幕に縫つて有る金絲の文字でも明かに分かる通り、此所に置いて有るのはハワイからの出品で、其中に土人の容貌躰格風俗習慣を見るべき寫眞が澤山有る。大通りを進んで右に曲がると韓國出品の一

構へが有つて此所には帽子、履き物、食器、煙管、團扇、敷き物、籠等の土俗品が有る。其隣りに有る清國出品も風俗を知る助けと成る。其隣りのヲランダ領印度と云ふ札を掲げた所には中々面白い物が有る。ジャヴア土人製の木像、踊り人形、檳榔子入れ等殊に意を惹くに足る。

參考館は諸外國からの出品を置いて有る所、從つて夫れ夫れの部に關係有る夫れ夫れの國の人の來て居る事が有るので、其邊を見歩いて居れば自然諸國の人に出會ふ事も出來ます。參考館の隣りはカナダ館。夫れを通り越して坂を登り、正面の美術館に付いて左の方へ曲がると右の突き當たりに支那風の建築が見える。是が評判の高い臺灣館で有ります。建て物夫れ自身が既に臺灣家屋の標本で有りますが、館內に入れば臺灣の住民及び其風俗に關する種々の智識が得られます。

臺灣館の門を入ると右の方が篤慶堂への通路の入り口に成つて居る。此入り口を入ると臺灣土人即ち支那種族の者の室內の有樣が其儘に示して有る。行き當りの所を左に曲がると壁に樣々の地圖が下げて有りますが、殊に面白いのは臺灣住民民族分布圖で、福建人、廣東人、內地人、熟蕃人、生蕃人、外國人と區別して各の分布が地圖の上に色別けで示して有り且つ圖の一隅には是等の人口の多少を示す表が掲げて有ります。此廊下の行き當たりの所が篤慶堂で此所には實大の人形が數躰置いて有る。其種類は新婚服裝の男女、僧侶、道士等で容貌も好く出來て居ますが、服飾は實物其儘故、之を見れば彼の地に於て各種の人に接した心地がします。是等の人形の側には風俗圖や衣服雛形が掲げて有ります。左へ曲つて中庭の方へ出やうとすると左の方に又地圖が有る。是れは臺灣に於ける言語の現況を示したので有る。中庭へ出て右へ曲がると隅の所に臺灣料理の店が有つて此所の給仕女に二人の土人が居る。左へ曲がると賣店が有り、行き止まりに臺灣喫茶店が有つて此所にも土人の女が居る。中庭の中央には奏樂堂が有り、其所に美事な轎が据へて有る。門の所迄戻つて篤慶堂と反對の方に入つて見ると此所には生蕃の容貌を示す寫眞、風俗を示す諸標本が有つて、各の解說を讀みながら是等を熟視すれば生蕃に關する事

は精く知る事が出來ます。右の方は總て臺灣物產の陳列所では有りますが、此所にも住民の生活狀態を示す物が澤山有ります。列品の番人には土人が用ゐて有りますから、是れ亦見逃がすべからざるもので有ります。

場內で注意すべきは先づ此位なものですが、場外で是非見なければ成らぬのは第一に人類館。此事は前號に載つて居る松村氏の文で好く分かりますから、今詳記するは止めにします。次に見る可きは動物園で、此所には類人猿の剝製、骨格、及びボルネヲ其他附近諸地方の土俗品が有ります。前者は人躰との比較を試みるに於て價値が有り、後者は人類現狀を知る一つの輔けと成ります。世界一週ジオラマも或る部分は現狀を考へる據と成ります。

以上列擧したものを注意して見る時には人類學研究上多少利益する所有るべきは疑ひを容れません。私は將來內國と限らず勸業と限らぬ大博覽が開設され、其一部として人類學部の置かれる事を望む者では有りますが、今回の如き場合に於ても心掛け次第では人類學上の智識を得る事が出來ると云ふ事を固く信ずるので有ります。

○左得手と右得手（承前）

寺石正路

第五右袵と左袵

人類が右得手より割出したる風俗の中猶一つ著明にして獨立研究の價値ありとなすべきものは衣服の着方に右袵左袵の區別を生ぜること是なり

抑人類が極めて未開なる原始時代に在りては素より衣服もなく裸躰の儘にして全く動物的狀態を以て生活せしならんも其少しく進步せる時代に及びては始めて衣服を用ひて體溫を保ち兼て一種の粧飾として之を着用することを始めしならん

偖人類が始めて衣服を着せし有樣は如何なりしやを想像するに最初は恐くば鳥皮獸皮類を無造作に身に纏ひ其少しく進步せる時代に及びては植物性動物性の織物を半身或は全身に引纏ひしならん然してかゝる場合に在りては其衣服の仕立方も樣々にして袖あるものあり袖なきもの